

異世界に飛ばされた

10

Where is Ossan going in
another world?

おっさんは
何処へ行く？



シ・ガレット
ci garette

目次



第①章

プレオープン

.....

007

第②章

商会の正式稼働直前

.....

207



タクマ

異世界に飛ばされてきたおっさん。趣味を楽しみながら異世界を旅する。

タ夏

タクマの婚約者。タクマと同じように異世界に飛ばされてきていた。

スージー

バミル王国の王妃様。王族にしては庶民的。

シーナ

双子の姉。元気で活発なしっかり者。

ザイン

バミル王国の優秀な宰相。奥さんが若い。

タクマの仲間達



ヴァイス



ゲール



アフダル



ネーロ



ジュード



ブラン



レウコン



ナビ



アルテ



ヴェルド

ルーナ

双子の妹。おっとりしていて優しい女の子。

主な登場人物

第①章

プレオープン

1 予行演習当日

タクマのせいで随分と立派な町になってしまった、地方都市トーラン。そんなわけで人の流入が爆発的に増えてしまったのだが、ひとまず宿を建てる事で対処する事になった。

宿自体の設備、宿泊客に出す料理、従業員の接客教育、従業員の制服、そしてお客さんに着てもらう寝間着——事前に準備しておかなければならない事はたくさんあったのだが、タクマの家族や協力者の頑張りによってそれも無事終えた。

そして、特別な客を招待して宿が上手く稼動するか試すという、プレオープンの日を迎えるのだった——



宿の予行演習当日。宿の運営を任されているスミス一家や従業員達は、緊張の面持ちでその日を迎えていた。

タクマの目の前で、彼の恋人である夕夏と日本人転移者のミカが食事をしている。

「まさか私達まで参加とはね……」

「うう……緊張する……」

夕夏はため息を吐きながらも食べていたが、ミカは食が進まないようだ。タクマがミカに向かって言う。

「緊張するのは分かるが、食べておかないと持たないぞ」

「タクマさんの言う通りだ。ミカが着付けをするわけじゃなくて、従業員がやるのを確認して、間違っていたら指摘するだけでしょ？ 今からそんなに緊張しても仕方ないよ」

そう声を掛けたのは、ミカの夫のリユウイチだ。彼は赤ちゃんのタイヨウを抱いていた。

今回、夕夏とミカは着付け責任者として演習に参加する事になっている。ただ、着付け講習を受けた従業員のフォローをするだけ、それなのに二人は緊張していた。

ミカがため息交じりに応える。

「分かっているのよ、スージー様達はミスをしたくらいで怒らないって事は。私達が緊張しているのは、宿の売りになってしまった浴衣を気に入ってくれるかって事なの」

予行演習の招待客は、パミル王国の二人の王妃、スージーとトリスとその子供達。そして宰相のザイン一家であった。

また、浴衣はヴェルドミールに住む者にとって、相当斬新なデザインである。受け入れてもらえ

なければ、浴衣を寝間着にするという目論見自体崩れてしまう。そうなれば宿の魅力が減ってしまう、二人はそう心配していた。

「浴衣についてはギリギリで思いついたものだし、そこまで気にしなくていい。確かに受け入れられるかは分からないが、従業員達は問題ないって言っていたじゃないか」

タクマには勝算があった。

前日、従業員達に浴衣を見せた際、彼らはデザインを嫌うような態度を見せなかったのだ。あの反応であれば、客は問題なく来てくれるに違いない。

夕夏がミカを宥めるように言う。

「タクマの言う通り、従業員のみんなの反応は悪くなかったわ。色は淡く落ち着いたものにしたし、男性物も子供物の甚平も嫌われるデザインじゃないはずよね」

「ああ。自信を持って良いと思う」

二人にそう言われ、ミカは多少落ち着きを取り戻した。その後、ミカの顔色が戻る事はなかったが、彼女はしっかりと食事を取った。

食後、二人は宿のあるトールンへ向かっていった。

リュウイチはミカの事を心配そうに見ていたが、彼女のセンスを信じているようだった。彼はタイヨウを連れて自分の家へ戻っていった。

庭では、早起きをした子供達が、タクマの守護獣であるヴァイス達とともに体をほぐしていた。

今日は王妃達の子供であるマギーとショーンが遊びに来るので、日課としていた鍛錬を休みにしたので。

タクマが子供達に近づく、みんな元気に挨拶してくる。タクマの家では、挨拶するように厳しく教え込まれていた。人と会う時に最初に交わす挨拶ができていれば、相手は悪い気分にはならないのだ。

「これからマギー達を迎えに行くから、みんな仲良くな。それと、ヴァイス達はハクを鍛えるだろうけど、あまり無理は駄目だぞ」

「[[[はーい]]]」

ハクというのは、猫の姿で転生してきた日本人男性だ。先日宿の看板猫になる事が決まったものの、まだ能力の使い方に不安があるので、ヴァイス達が鍛えてあげる事になっていた。

タクマはヴァイス達を送り出すと、招待客である王妃達を迎えに行くため、空間跳躍を使って城へ跳んだ。

城の謁見の間にタクマが到着すると、目の前にはスージー達王族と、宰相のザインの一家が待つていた。移動する時間を省くために、集合してくれていたようだ。

「おはようございます。わざわざ集まってくれたんですね」

そう言ってタクマが頭を下げると、スージーが口を開く。

「同じ招待客として行くのですから、集まっておいだの。宰相の一家なら私達も面識があるしね」

ザインは苦笑いを浮かべていた。一応城の中なので、スージーの碎けた言葉遣いが気になったのだらう。ザインの後ろにいる彼の家族も驚いていた。

ザインは大きいため息を吐き、タクマに話しかける。

「王妃様の立ち振る舞いについては、この場にいる者の心に仕舞っておくとして……タクマ殿。本日は、私を含めた家族を招待してくれてありがとう。皆、この日を楽しみにしていたのだ」

タクマは笑みを浮かべると、ザインと彼の家族に挨拶する。

「そう言っていただし、俺も嬉しいですよ。ゆっくり過ごしていただけたら幸いです。家族の皆さん、俺はザイン様にお世話になっていて、タクマ・サトウと言います。今日は、俺の商会で始める宿の予行演習に付き合っていただし、感謝申し上げます。不慣れで目につくところもあるでしょうが、寛いでいただけると嬉しいです」

ザインの家族は、タクマの優しい様子を見て緊張を緩めた。

「初めまして。私はザインの妻でユーミと申します。本日はご招待をいただき、ありがとうございます」

ユーミはザインとは年の離れた若い女性だった。髪は長くきれいなブラウンヘアで、スタイルはスレンダーで華奢に見える。

ユーミの後ろには、二人の子供が控えていた。二人はユーミから挨拶を促されると、タクマの前にちゃんと出てきた。

タクマは膝をつき目線を合わせると、二人の挨拶を待つ。

「おはようございます！ わたしのなまえはシーナです！」

「おはようございます！ わたしはルーナです！」

シーナの髪型は、母親譲りのブラウンヘアを短く切り揃えた、いわゆるボブカットだ。ルーナは同じブラウンヘアだが、腰まであるロングヘアである。

きちんとした挨拶ができた二人に、タクマは笑みを浮かべる。

「丁寧な挨拶がありがとう。挨拶をできて偉いね」

二人の頭をいつもの感覚で撫でると、タクマはハッと気付く。

王族に対してさすがに失礼だったかもしれない。そう思っただけでザインを見ると、彼は笑みを浮かべて頷いていた。ザインはこれくらいで怒るような男ではないのだ。

タクマはシーナとルーナに声を掛ける。

「今日は宿にお泊まりだけど、その前に俺のお家で遊んでもらうよ。そこには俺の子供もたくさんいるから、仲良くしてくれるかな？」

シーナとルーナは、嬉しそうに笑みを浮かべる。

「おともだちになれる？」

「あそんでいいの？」

「ああ、たくさん遊んで、お友達になつてくれると嬉しいな」

そう言つてタクマは二人を撫でて立ち上がる。

そして、全員に向けて口を開いた。

「さあ、ここで話していても時間をもつたないので、早速行きましょうか」

タクマは魔力を練り上げて八人を範囲指定すると、タクマ達の住む屋敷のある湖へ跳ぶのだった。



「あはははは！ ルーナちゃん、シーナちゃんこっちー！」

「マギーちゃんとショーンくんもはやくー！」

到着した途端に仲良くなつた子供達は、タクマの自宅の庭で走り回っている。王妃二人とザイン夫妻は、楽しそうに遊ぶ自分達の子供を見て目を細めていた。

「やっぱりマギー達はこちらが好きみたいね。思いっきり体を動かせるというのもそうだけど、裏表のない友達がいる事は、掛け替えのないもののね」

スージーがしみじみと言った。

ザインは申し訳なさそうに返事をする。

「マギー様とショーン様は、お立場上どうしても孤立しますからな。私共も気にはなっていたのですが……」

ザインは、マギー達に友達を作らせようとしていたのだが、貴族の子供は親に何を仕込まれているか分からないのでできなかったのだ。

つらそうに言うザインを見て、スージーとトリスは苦笑いを浮かべる。

「こればかりは仕方ないわ。私達は王族なんだし。マギーも分かっているからこそ、我が儘を言わないし」

「ええ、ショーンもその辺は理解してます。それに、今はこうやってタクマさんのお宅で思いっきり遊べるから問題ないわ」

二人はザインに「気にしないように」と付け加えた。

ザインは恐縮しつつ、話題を変えるように尋ねる。

「ところで、マギー様達はここで何をして遊んでいるのですか？」

「そうねえ。今みたいになら外で身体を動かすのがほとんどね。疲れたら木陰でお昼寝したり、時には盛大に転んだりもするわね」

スージーの返答に、ザインは驚きを隠せなかった。マギーもショーンも、城ではとても大人しい子供だったのだ。

「それにね。身体を動かすようになってから、丈夫になっているみたいなの。体調を崩す事がほと

んどなくなつたわ」

横で聞いていたタクマも、それには驚いた。

二人はここに来るようになってから、健康優良児となっているようだ。きっと身体を動かす事で、基礎体力が向上しているのだろう。

ザインがタクマに話を振る。

「タクマ殿。マギー様とショーン様の身体が丈夫になっているようだが、それは何故なんだ？」

「特にこちらで何かをしているわけではないですよ。ウチでやっているのは、子供達と思いきり遊ばせて、疲れたら眠らせ、お腹がすいたらお腹いっぱい食べさせる。それだけです」

ちなみに、タクマはマギー達に禁止事項を与えていない。何をしても駄目とかいっさい言っていないのだ。

一方、城では乳母うはのような大人が子供達を監視し、何かと言うと止めたりしていた。タクマがスージーとトリスに、ここでは子供の好きに行動させるように頼んだ時、二人はそれを受け入れたのだ。

少し考え込んでいたザインに、タクマは告げる。

「まあ、子供は限界まで遊んで、いっぱい食べて寝る。それをしていれば自然と丈夫になると、俺は思ってますけどね」

そんな話をしていると、あつという間にお昼が近くなってきた。全力で遊んでいた子供達は、

いつの間にか木陰で寝息を立てている。

タクマはザインに話しかける。

「まあ、遊びとはいえ、本気で走り回っていればあなりますよね。体力をつけたら、自然と体調を崩す事も少なくなるかと」

「確かに体力は必要だな。お二人にとってここでの遊びは、良い運動になっているというわけだ」

それからしばらくして、子供達が目を覚ました。

そのまま早めの昼食を取る事になった。出されたのは、パンに鶏とりのささ身とトマト、レタス、チーズを挟んだサンドウィッチだ。それに、生搾なましばりのオレンジジュースを添えている。

そのメニューを見たザインは、子供達が野菜を嫌がるのではないかと心配した。マギーとショーンは、これまであまり野菜を好んで食べてこなかったのだ。自分の子供であるシーナとルーナも野菜は好きではない。

シーナとルーナが食べるのを躊躇ちゅうちよしているところを見て、タクマの子供達が不思議そうな顔で質問する。

「あれー？ シーナちゃんもルーナちゃんも食べないのー？」

「おやさーい、にがいからきらいなの……」

「おいしくない……」

ザインは、シーナとルーナを注意しようとするが、タクマはそれを止めた。すると、子供達が二人に語りかける。

「お野菜は、大事だよ。お父さんが言ってたんだ、お野菜をいっぱい食べれば、病気になるんざらくなるんだって」

「そうそう。病気は苦しいから嫌だよ。ばくも病気が嫌だからお野菜食べるの。それに、お野菜は苦いだけじゃなくて、色んな味がするからきつと大丈夫だと思ふよ」

タクマの子供達に促され、シーナとルーナは恐る恐るサンドウィッチを口に入れた。

次の瞬間、二人の表情が明るくなる。

「あれ？ おいしい！ にがくない！」

「おやさいのあじはするけど、おいしいあじがする！」

二人は笑みを浮かべながら、サンドウィッチを平らげてしまった。

ザインは、自分の子供達が野菜を笑顔で食べるのを見て、驚きを隠せなかった。そして目の前にあるサンドウィッチを口に入れた。

「！ これは……」

タクマが出したサンドウィッチに入ってる野菜は、細かく刻まれていたり、ドレッシングが掛けられていたり、苦味を感じないように色々と工夫されていた。

「子供は苦みに敏感です。だから小さいうちは野菜が嫌いなんです。だったら食べやすいように

してやれば、あのように食べてくれるというわけです」

この世界のほとんどの家では、ここまで手間を掛けない。ザインとユーミは次からは自分の家でもこうしてもらおうと決心しながらサンドウィッチを平らげる。

ちなみに、スージーとトリス、マギーとショーンは一心不乱に食事を進めていた。

食事が終わると昼を少し回っていたので、いよいよ移動だ。タクマの家の子供達とマギー達は再び会う事を約束してお別れをした。

「さあ、行きましょうか」

タクマは再び空間跳躍を使い、トーランのコラル邸へ跳んだ。

到着すると、そこにはコラルが待機していた。国の重要人物がいるので、護衛を用意してくれたようだ。

「スージー様、トリス様。ようこそトーランへ。宿までの道中の警護は、私の私兵達が行います。タクマ殿がいるので安全だとは思いますが、護衛は必要なものですのでご了承ください」

跪きながらそう言うコラルに、スージーは柔らかな笑みで受け答える。

「コラル殿。お気になさらないで。護衛が必要なのは分かっています。宿までよろしく願いますね」

「はっ！ お任せください。ザイン様、今日は宿の視察だそうで、ゆっくりご覧になられてくだ

さい」

実は、ザインの視察は名目でしかない。身体を休めてもらうのが、本来の目的である。

その事はすでにコラルにも話してあったが、どこに耳があるか分からないので、コラルはその設定を忠実に守っている。

「うむ。コラル殿も忙しいところ、色々と尽力してくれて感謝する。道中の警護は頼んだ」

挨拶が終わると、コラルは全員を馬車へ案内した。

コラル邸の門の前には、豪華な馬車が二台用意されていた。

二台の馬車は同じくらいの豪華さだが、大きさが違う。大きい馬車は王族用、それより一回り小さいのがザイン達の馬車だ。

それぞれに乗り込むと、その前後に馬に乗ったコラルの私兵が付いた。

その後、タクマはザイン一家が乗る馬車に乗り込んだ。タクマが、馬車を護衛するコラルの私兵に声を掛ける。

「じゃあ、出発しようか」

「承知いたしました。全員乗車！ 目的地はタクマ殿の宿！」

号令とともに、馬車は出発する。

ちなみに、何故タクマがザインの馬車に乗ったかという点、王妃達が乗っている馬車に乗ってしまうと、いらぬ誤解を受けるかもしれないからだ。これはコラルから言われた事なので、タクマは

素直に従った。

「タクマさま。きょうお泊まりするのは、どんなところなの？」

「わたしたち、お泊まりするのはじめてだから、たのしみなの！」

シーナとルーナは人懐っこい笑みでタクマに聞く。

「そうだなあ。きつと今まで見た事のない建物だから、外見を見るだけでも面白いかもしれないね。それに、泊まるお部屋も面白いと思うから、楽しんでくれたら嬉しいな」

タクマは二人に笑顔で答える。

シーナとルーナは目を輝かせて、早く着かないかとそわそわしていた。さすがにザインとユーミはしゃぐ事はなかったが、楽しみにしているようで表情は明るかった。

道中、ザインはタクマに話しかける。

「タクマ殿。挨拶の時には話せなかったが、私の妻が若い事が気になっていたのだろう」

ザインは、自分と比べてあまりにも若いユーミを紹介した際、タクマの表情がわずかに動いた事に気が付いていた。

「それは……」

タクマが言い淀んでいると、ザインは苦笑いを浮かべて口を開く。

「そんな言いづらい事ではないのだ。私が婚期を逃しただけの事だ。だからこそ、ユーミと出会え

たのだから」

ザインは、仕事ばかりしていたせいで結婚できなかったらしい。しかし、そのおかげで今の妻と出会えたという。

ユーミはザインの隣で、頬を赤く染めながら頷いていた。

「なるほど。気を遣ってくれてありがとうございます。確かに年齢差という意味では気にはなりましたが、それ以外には思うところはありません。幸せそうで何よりです」

タクマがそう言うと、ザインは満足そうに頷いた。

そんな事を話していると、馬車が止まった。どうやら宿に着いたようだ。先ほど話しかけた私兵がタクマの所へ近寄ってくる。

「タクマ様。宿に到着しました。周囲に人もおりませんので、降りていただいて大丈夫です」

「ありがとうございます。では、降りましょうか」

タクマは私兵にお礼を言うのと、先に馬車を降りてザイン達に降車を促す。そして、もう一つの馬車に向かい、スージー達をエスコートする。

「皆さん。到着しました。辺りの安全は確保してありますので、降車いただいて大丈夫です」

まずはマギーとショーンを抱っこして降ろしてやる。そして、スージーとトリスの手を取って、降車の手伝いをした。

私兵に降車を手伝われたザイン達も、スージー達のいる馬車の前に来た。そして宿の建物を見て

哑然^{あぜん}としている。

スージー達も同じような反応を示した。

「大きいわね。それにすごくきれいな建物……」

「ええ。見た事もない建物ですし、それ以上に神聖な感じがします……」

マギーとショーンも宿の大きさを目にして、テンションが上がっているようだ。

「おっきいねー!」

「うん。これがきょう泊まるところなんだね。おっきくてカッコいい!」

全員の反応を見て、タクマは満足そうに頷いた。そして全員に話しかける。

「さあ、中に入りましょう。もっと驚きますから」

2 チェックイン

宿に入った二組は、この日のために頑張ってきた従業員達に迎えられた。

「」「」「いっしょいませ!」

受付の前に並んだ従業員達が、一斉に声を出す。スミス一家の娘のアンリと妻のカナンも、その場に立っている。

「いらつしゃいませ！ 今日私達の宿にお出でいただきまして、ありがとうございます。案内をさせていただくカナンと、娘のアンリです。何かございましたら、どうぞなんなりと申し付けてください」

カナンはそう言って、アンリとともに深く頭を下げた。カナンに続き、アンリが宿への入り方を説明する。

「この宿は、土足禁止となっております。ここで履物はきものを脱いでいただき、壁に並んでいる靴入れに入れてください」

靴入れはロッカータイプで、靴を仕舞って扉を閉めるとその人間の魔力で施錠せじようされる仕組みになっていた。同じ人間でないと開けられないというわけである。

全員が靴を仕舞うと、アンリはスリッパに履き替えるように促す。

「それでは受付へどうぞ」

二人は八人を連れて受付へ移動を始める。二家族の荷物はタクマのアイテムボックスに入れてあったので、タクマはそれを従業員達に渡した。

受付のカウンターには、スミスとアンリの配偶者であるマークがいた。

スミスが声を掛ける。

「本日は、当宿をご利用いただきありがとうございます。責任者のスミスと申します。早速ですが、お泊まりになる方のお名前をこちらの紙にご記入ください」

スミスは一冊のノートをスージーとザインの前に出した。

「これに名前を書けばいいのですね」

「うむ。変わったシステムだ」

二人は、渡されたノートに自分の名前と一緒に泊まる家族の名前を記入していった。

するとノートは青く光り始める。書いていた二人はその光に驚いて、一歩後ろに下がった。慌ててスミスが告げる。

「申し訳ありません。説明が足りませんでした。このノートは魔道具で、名前を書くとき青く光るのです。なお、偽名を書いた時は赤く光ります。当宿は、皆様のような高貴な方が泊まるように用意された施設なので、身分をしっかりと明かしてもらうのが決まりなのです」

スミスの説明を聞いて、納得したように頷くスージー。

ザインが質問する。

「なるほど。では、偽名を使った者は泊まれないという事だな？ ちなみに、強引に君達を脅おどして泊まろうとした場合はどうなる？」

「敵意、殺意、悪意などを持った人はその場で無力化されます。なお武器をお持ちの方は、受付に武器を預けていただきます。この宿ではいっさいの暴力が認められておりません」

「ふむ。安全性に関しては最高レベルにあるわけか……」

ザインはスミスの説明を聞いて納得した。

一通り話が済んだところで、部屋に案内する事になった。

「では、受付手続きが終わりまりましたので、スージー様一家はカナン、ザイン様一家はアンリについて、お部屋に移動してください。今晩はごゆるりとお過ごしくださいませ」

スミスはそう言って、マークとともに頭を下げた。

「では、ご案内いたしますのでこちらへどうぞ」

カナンとアンリが二組を二階の客室へと連れていく。

スミスとマークはその背を見送ると、急に膝ひざから崩れ落ちた。

「店長！ 大丈夫ですか!？」

従業員に支えられて立ち上がったスミス。彼は放心状態となっていた。

「あ、あんな感じで大丈夫だっただろうか……手続きの説明をせずに、混乱させてしまったようだが……」

スミスは自分の失敗で王妃達が気分を悪くしたと思っていた。周りで見ていた従業員達は、大丈夫だと励はげます。

「あれくらいなら問題ないかと思います。言い忘れた事もすぐにフォローできましたし、質問にもきちんと答えてましたから」

「そうか？ だったら良いのだが……」

力が抜けて自分の力で立てなくなってしまったスミスとマークは、従業員達によってフロント裏

の小部屋へ運ばれていった。

従業員の一人がスミスに声を掛ける。

「後は私達がやります。どうにか乗り越えていきましょう」

「ああ、そうだな。みんなで頑張ろう。それに、俺達よりもカナンとアンリの方が大変だろうしな……」

その言葉を聞いた従業員は、一つの質問を投げかけた。

カナンとアンリは、王族や貴族と接する事に慣れていない。元々、城で勤めていた自分達がやった方が良かったのではないかと思ったので、それについて聞いてみたのだ。

「確かに、みんなにやつてもらった方が良いに決まってる。だけど、この試練は俺達一家のためというのが大きいな。みんなは、高貴な存在と日頃触れ合っていたから対応はできるだろう。だが、俺達にとっては初めて尽くめだ。だからこそ、タクマさんは俺に任せてくれたんだと思うんだ」

スミスはタクマの意図を的確に理解していた。

そもそも宿泊業務の流れを確認するだけなら、誰を泊めても良いはずだ。それをわざわざ王族を連れてきたというのは、それなりに意味がある。今回の演習を乗り越えられなくては、責任者として住み込んでいる意味がない。スミスはするように従業員達に話した。

「確かにそうかもしれません。私達は商會長の考えを理解してなかったのですね」

従業員達はなお一層、この親子の手助けをしようといふ心に決めるのだった。

3 王妃達の衝撃

受付を終え、カナンに案内されている王妃一行。
彼女達は、改めて宿の大きさに驚いていた。外観をただだけでもかなり大きいと感じていたが、中はさらに広がった。

カナンの案内で階段を上り、長い廊下を奥へ歩いていく。
突き当たりの部屋が、スージー達の宿泊する部屋だった。

「こちらがスージー様達のお部屋でございます。入り口でスリッパをお脱ぎになって、お入りくださいませ」

カナンは扉を開けて、スージー達を迎え入れる。

スージー達はスリッパを脱ぎ、中へ入った。

「これは……変わった部屋ね……」

部屋には畳が敷かれていた。畳を見た事がないスージー達は、その不思議な床の踏み心地に驚く。しつかりとした硬さはあるが、その感触は石の床と違って温かみがあった。

「おかあさま！ 床がきもちいい！」

マギーは床の感触が楽しくて、ションととも走り回った。スージーが、宿の迷惑になるからと止めようとすると、カナンが告げる。

「この宿の客室には、防音の魔法が掛かっています。なので、お子様が暴れたくらいでは音が漏れる事はありません」

「……そうなの。ただの宿ではないと感じてはいたけど、そこまで規格外なのね」

スージーはそう言い、トリスと一緒にソファアに座って、部屋の周囲を見回す。

木がふんだんに使われた部屋には温かみがあり、とても居心地がよい。普段生活している城とは違っていた。

マギー達はひとしきり走り回って満足したのか、しばらくしてソファアに腰を落ち着けた。

カナンがスージーに声を掛ける。

「それでは、室内をご案内させていただいてよろしいでしょうか？」

「ええ、お願いするわ」

それからカナンはスージー達を、寝室、トイレ、クローゼットと順に案内していった。スージーがクローゼットで何かに気付く。

「ねえ、さっきの服は何？ 見た事もないデザインだったようだけど……」

女性なだけあって服には敏感なようだ。この世界では、宿が宿泊客の寝間着を用意するという風習はない。

カナンは笑みを浮かべて答える。

「これは宿が用意した部屋兼寝間着です。これからご案内するお風呂に入った後で、着替えていただけたらと思います」

「そんな事までしてくれるのね。すごい心遣いだわ」

スージーが感心していると、カナンは笑顔のまま答える。

「この宿は、スージー様のような身分の高い方が使われますから、サービスは最高のものと商会長が作り上げたのです」

「さすがね……」

続いて、スージー達は風呂へ移動する。

脱衣所に入ると、そこはさらに木材を贅沢に使っていた。

部屋は全て板で覆われ、壁には脱いだ服を置くための棚が設置されている。女性には嬉しい鏡付きのドレッサーまで完備されていた。

「こちらで服をお脱ぎなつていただき、奥の引き戸からお風呂へ移動していただきます。お風呂を確認するのは、入浴される時がよろしいかと思います」

カナンは風呂の説明をあえてしなかった。それが却って、スージー達の好奇心を刺激する。

「じゃあ、早速入ろうかしら。みんなはどう思う？」

スージーがみんなで入ろうと提案すると、シヨーン以外は賛成だった。シヨーンは男の子なので、一緒に入るとは言えないようだ。

「シヨーンは一人で入れる？」

「大丈夫です。僕はお母様達の後で入ります」

シヨーンは一人でリビングへと移動していった。

「では、皆様はお風呂の入り方などは分かりますか？」

「ええ。しっかりと身体の汚れを取った後で、湯船に浸かるんですよ。その辺は城でもやっていきますので大丈夫ですよ」

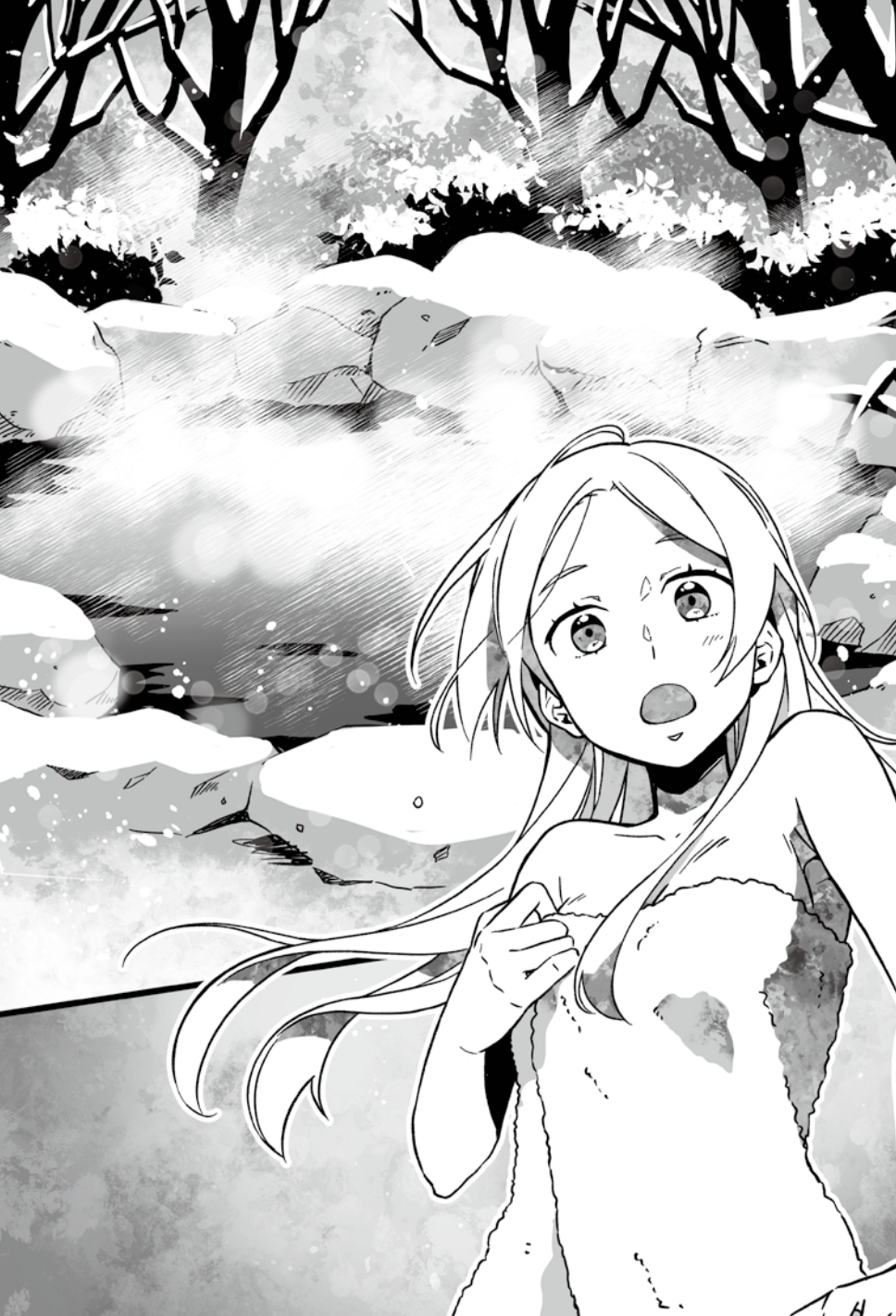
「分かりました。お風呂を出る時にこの突起に触れてください。これはお風呂を上がったと、私に知らせるものですから」

壁のボタンを指し示しながら、カナンは説明を終えた。

カナンがその場を離れると、スージー達は服を脱ぎ始める。普段は使用人に服を脱ぐのを手伝わしてもらっているが、王妃二人は元々商家の出である。自分の事は自分でできるので、まったく問題はない。もちろん、マギーも自分でできるようになっている。

服を脱いで籠に入れ、彼女達は大きなバスタオルを身体に巻きつけて風呂へと移動した。

引き戸を開けると、そこにはあり得ない光景があった。スージー達の目の前には、雪景色が広がっていたのだ。



「エー！? なんて?」

「なんで外に!」

「わー、きれいだねー」

目の前の光景に、バスタオル一枚で固まる王妃二人。マギー一人呑^{のん}気に喜んでいる。衝撃を受けたスージーは、思わずカナンを呼ぶ。

「カナンさん! ちょっと、カナンさん!」

驚いたカナンは、リビングから慌てて戻ってきた。

「どうかしましたか? 何か不備でも……」

「な、な、なんで脱衣所の扉を開けたら雪国なの!? それに外でお風呂に入るなんて……誰かに見られたら……」

自分達の恰好を思い出したスージーは、身体を隠すように手を動かす。

「そうでした。説明不足すぎましたね。お風呂場には空間魔法が付与されていて、普通の空間ではありません。なので、人に見られる心配はありません。そして空間の景色ですが、商會長であるタクマさんの故郷を再現したものだそうです。事前に説明しておくべきでした。驚かせてしまい申し訳ありません」

カナンが頭を下げると、スージーは冷静になった。

「そ、そうだったの……驚かせたという気持ちは分かったわ。これほどの光景ですもの、説明な

しで見せたいわよね。でも、説明は欲しかったわ。そうすれば私も慌てずに済んだのに……」

「本当にすみません……」

自分のミスに顔を青くするカナン。

スージーは、カナンの肩を優しく叩いて続ける。

「良いのよ。そういう事に気付くための予行演習でしょ？ 私達も怒る気はないの。ただ、ちょっとびっくりしただけ。私達も珍しい宿に泊まれる事に浮かれていたわ」

「申し訳ありませんでした。この経験をしつかりと心に刻んで、これからの接客に生かしてみせます」

「ええ、頑張つてね。じゃあ、私達はこの素晴らしいお風呂を堪能たんのうさせてもらうわ」

スージーはそう言つて、風呂の中へ消えていった。

誰もいなくなつた脱衣所で、カナンはまっすぐ立っていられず壁に手をつく。

「王妃様が優しい方で良かった。下手すると大変な事態になっていたわ……」

カナンはスージーに感謝しつつ、落ち着きを取り戻そうとする。そこへショーンがやって来て、カナンを気遣う。

「おばさん、大丈夫ですか」

カナンが振り向くと、ショーンは心配そうな顔をしていた。

「すみません。お恥かしいところをお見せして……すぐにそちらに戻ります」

慌てて動こうとすると、ショーンはカナンに手を差し出す。

「大丈夫。今は僕しかいないし、ゆっくり戻れば良いです」

ショーンはまだ少年だが、紳士の振る舞いができていた。

カナンはショーンの気遣いに感激し、すぐに立ち直る。子供の優しさというのは、嬉しいものなのだ。

「お気遣いありがとうございます。おかげで元気が出ました。一緒にリビングへ戻しましょう」

カナンはショーンの手を借りて客室へ戻るのだった。



風呂場に入ったスージー達は、辺りを見回す。

そうしてこの空間の空調などが、しっかり管理されている事に気付いた。雪景色にもかかわらず、寒くないのだ。

「冷静になってみると、ここが外ではないという事が分かるわね。衝撃が大きすぎて、うろたえてしまったけど」

そう言つて恥ずかしそうにするスージー。

それから三人は浴室に入り、まず洗い場で身体と頭を洗っていく。王族であってもこの広さには

慣れないらしく、スージーとトリスは落ち着かなかった。

「城のお風呂も初めての時は驚いたものだけど、ここの衝撃には勝てないわね」

「ええ、最高の贅沢だと感じるわ」

二人が話しながら掛け湯をしていると、マギーは待ちきれずに急かす。

「おかあさま！ はやく！ おふろにはいろ！」

「ほら、はしたないわ。もう少しお淑やかにね」

スージーはマギーを宥め、掛け湯をしてやる。

身体を洗ったところで、いよいよ入浴となった。木で作られた浴槽からは、とてもいい香りが漂っている。

風呂に浸かった三人は、思わず息を吐き出した。

「「ふわー……」」

適温に保たれたお湯が、三人の身体を包み込む。

「これは、すごく気持ちがいいわ……」

「何か嫌な事があっても吹っ飛んでいく感じ……」

「なんかお湯がきもちいいのー。やわらかいー」

マギーの感想に二人の王妃はハツとする。手でお湯を掬うと、マギーの言ったように柔らかに感じた。

ただの水を温めたのではないらしく、彼女達の肌に変化があった。いつも乾燥してかさついていた肌が、潤うるおっていきような感じがした。

「嘘……肌がつつるつるに……」

「なんで？ 肌が若返ってる感じがする……」

二人は自分の肌を触りながら、自分の身体に起こっている変化に驚いていた。しばらく浸かっていると、マギーが熱いと言い出したので出る事にした。

風呂から上がったスージー達は、脱衣所にあるボタンを押す。すると、客室にいたカナンが寝間着を持って現れた。

「お風呂はいかがでしたか？」

「すごく気持ち良かったですわ。それに……ねえ……」

「ええ、なんだかとても肌の様子が……」

王妃二人は自らの変化に戸惑いを感じているようだ。それを察したカナンは、二人が身体を拭いている間にタクマから聞いている範囲で説明を行う。

「宿のお風呂は温泉で、お湯には肌に潤いを与える効果があるそうです」

「ただの水を沸かしたのとは違うのね」

「ええ。タクマさんが言うには、ただの水を沸かしても効能はないのだそうです。地下深くで色々な成分が溶け出した温泉だからこそその効果だそうです。普通のお風呂より、身体の芯しんから温まって

ないですか？」

カナンの言った事は正しく、風呂から出て身体を拭いた後でも、不思議とポカポカと暑いくらいだった。城のお風呂では、身体を拭き終わる頃には冷えてしまっているというのに。

カナンはさらに続ける。

「普通、お風呂を出た後は肌が乾燥してしまうものですが、温泉のお湯には保湿効果もあると聞きました」

「確かに入浴後は肌がカサカサしてしまうので、オイルを塗る時があるわ……でも、ここではないわね」

スージーがそう言うと、カナンは頷いて話す。

「私達家族はこの宿で生活を始めたばかりですが、お風呂に入るようになってからは肌の調子が良いんです」

「あのね。わたしの髪の毛がいつもと違うの！」

カナンに身体を拭かれながら、マギーは髪をアピールした。

マギーの話を聞いていた王妃二人が、「そういうえば」と言っただけで自分の髪を撫でる。カナンがその理由を説明する。

「髪の変化はシャンプーとトリートメントのおかげです。しっかりと説明を読んで使用してくれたのですね」

風呂には、この世界では珍しくシャンプーが置いてあった。またトリートメントもあり、洗髪後それを髪に付けしばらく置いてから流すように書かれていた。

「なんでわざわざそんな事をしなくてはいけなかったかと思っただけ、これほど効果があるなんて……それにすごく良い香りがする……私達が使ってる石鹸も香りはあるけど、ここまで香らないわ。すごく良い匂い……」

自分の髪を鼻に近づけて、匂いを確かめる三人。髪は、バラの香りに包まれていた。

三人とも身体を拭き終わったので、湯冷めしないうちに着替える。

カナンは、魔石が嵌め込まれた小さな箱を取り出して触れた。

「今のは？」

「これは、お着替えを手伝う人を呼ぶための装置です。ちよつと着方が分かりづらいので」

カナンは三人に待っているように言っただけで、一旦その場を去った。カナンが連れてきたのは、従業員の女性と夕夏だった。

「彼女達が着付けを担当します。私はショーン様がお待ちなので、戻らせていただきますね」

カナンは夕夏達と入れ替わりで客室へと戻っていく。

夕夏が説明を始める。

「それでは着替えを手伝わせていただきますね。まずはマギー様に着ていただきますね」
夕夏がそう言うと、一緒に来ていた従業員がマギーの前に跪く。

まず七分丈のズボンを穿かせ、ズボンが落ちないように紐を結ぶ。そして上着を着せると、その様を見ていたスージーが声を掛ける。

「この服にはボタンがないけど、どうやって前を留めるのかしら？」

「これは甚平という服で、ボタンで留めるのではなくて紐で結ぶのです」

従業員は、夕夏とミカから習った通りに説明する。そして、スージー達にも分かるように、結び目を見せてあげた。

「なるほど。二カ所で留めれば着崩れしにくいのね。それにしても、動きやすそうな恰好ね」

スージーがそう言うと、従業員が応える。

「お子様はたくさん動かれるでしょうから、男女ともこの甚平に決められたのです」

「タクマさんらしい配慮ね。子供の事を考えての衣装のようね」

手早く着付けを終えると、マギーは真っ先にショーンに見せに行った。

続いて、王妃二人の番である。

着付けできる者が二人いるので、一度にまとめてやる事になった。夕夏がスージーを担当し、従業員がトリスを担当する。

夕夏と従業員が、スージーとトリスの後ろに立つ。

まず二人に浴衣の袖に腕を通してもらう。用意した浴衣は寝間着にも使うタイプなので、腰で織り込みをしなくても良いのだ。次いで、背中の縫い目が中心に来るようにする。そして襟先を揃え、

裾をくるぶしの位置に合わせると、右側の襟を下にして前を重ねる。

最後に帯を締めれば完成だ。なお、用意していた帯は室内で過ごす事を想定しているので、5cm幅の柔らかい物である。それを前から後ろに回し、後ろで交差させて前に出す。蝶結びで帯を固定すれば完成である。

浴衣姿を見て、スージーとトリスは思わず呟く。

「これ……すごくかわいい……」

二人の王妃は、まるで少女のようにその場で回ったりしてはしゃぐのだった。しばらくして、トリスは客室に向かって声を掛ける。

「ショーンもお風呂に入ってきてなさい。きっと驚くわよ」



ショーンは脱衣所に来ると、服を脱いで籠へと入れた。

普段は服を脱ぐと使用人が勝手に片づけてくれるのだが、今日は自分でやった。備え付けてあるタオルを手に取り、腰に巻いて風呂場へ歩き出す。

その前に、後ろに控えていたカナンに声を掛ける。

「おばさん。僕は一人でお風呂に入れますよ？」

そうやって一人で風呂に入ろうとするのだが、カナンは首を横に振る。

「ですが、小さいお子様が一人で入るのは避けたいのです。ショーン様が一人で入れるというのは分かりますが、何かあってからでは遅いですから同行させてください」

そう言ってカナンは笑みを浮かべて笑いかける。

（あ……この笑顔はお母様と一緒に。何を言っても駄目な時と一緒にだ）

カナンは一人娘を育てた母親である。子供に駄目なものは駄目とはっきりと言えるのだ。

ショーンはこれ以上言っても覆る事はないと諦め、風呂の引き戸を開けた。

「……え？　なんで？」

母達と同じように目の前の景色に驚いていると、カナンは優しく説明をした。

話を聞いたショーンの反応は、母達とは違って落ち着いたものだった。母達が慌てているところを見ていたので、風呂に何かあると覚悟をしていたのだ。

「こんな景色を見るのは初めてですが、とってもきれいですね」

内心すぐく興奮しているのだが、一緒にいるカナンに幼稚な様を見せたくないので、できる限り冷静に言葉を紡ぐ。

カナンに通用するものではないのだが、彼女は黙って気付かない振りをする。男の子のプライドを傷つけないためだ。

「ありがとうございます。さあ、いつまでもそのままでは風邪を召してしまいます。お身体をきれ

いにして湯に浸かりましょう」

そう言いつつ、カナンは内心こう思っていた。

（可愛い子ねえ。冷静を装っているけど……きつと私にはしゃいだところを見せたくないんでしょね）

ショーンは促されるままにシャワーの前に座ると、身体と頭を洗った。彼はすぐに泡を流して湯船に移動しようとしたのだが、カナンが止める。

「ショーン様。背中が洗いきれていないようです。僭越ながら私にお背中を洗わせてくださいませんか？」

ショーンの機嫌を損ねないように、カナンは丁寧をお願いする。

「え？　ちゃんと洗ったつもりだけど……」

自分の背中を見ようとするが、さすがに無理である。ショーンの可愛い仕草に、カナンは微笑みながら優しく話す。

「背中も、自分で洗うのが難しいのです。さあ、もう一度座ってくださいね」

ショーンを再び座らせ、カナンはタオルを泡立てて背中を擦ってやる。子供なので激しくはできないので優しく洗っていく。

全体をしつかりと洗うと、シャワーで泡をきれいに流した。

「これで大丈夫です。さあ、肩まで浸かって温まりましょう」

カナンはそう言うと、入り口に戻った。一人でお風呂を味わわせてあげかったからだ。

ショーンは湯船に入ると、自分の髪を確認した。触ってみると、普段とは違って髪の毛に引っかかりを感じない。スルスルと髪の間を指が抜けていく。

「これはすごいや。いつもは髪を洗うとキシキシしたりするのにまったくくない。それにこの景色……きれいだなあ」

ショーンは湯に浸かりながら、辺りの景色をボーツと眺める。雪が降っている山々を見ていると、不思議と心が安らいでいった。

しばらくそうしていると、カナンから声が掛かる。

「ショーン様。そろそろ上がりませんか、のぼせてしまいます」

ショーンはハッと我に返った。そして自分の身体が温まっている事に気が付いた。

「え？ いつもより短いのになんぞ？」

「このお湯は温泉といって、色々な効能があるんです。肌がきれいになったりとかもそうですが、身体を芯まで温めてくれるんです」

カナンはそう言いながら、ショーンに近づいて手を差し出す。もし立てなかった場合を考えての事だ。

ショーンはカナンの手を借りて立ち上がると、そのまま風呂から出た。

脱衣所に移動し、身体が冷えないうちに水気を拭き取っていく。下着を着終えると、すでに従業

員が待機をしていた。出入り口付近には夕夏も控えている。

「じゃあ、甚平を着ましようね」

そう言って従業員は、ショーンに甚平を着せていく。

ショーンは甚平がとても肌触りの良い事に気が付いた。それをカナンに尋ねると、すぐに答えが返ってくる。

「これで寝るのですから、肌触りはこだわっているそうですよ。それに動きやすいでしょう？ 動いても楽なようになっていきますので、いっぱい動いても良いですからね」

そう言われたショーンは、嬉しそうに頷くのだった。



風呂を出たショーンは、客室へと移動した。

その後、マギーとショーンは食事の時間になるまで、思いつき部屋で遊んだ。今まで見た事のない部屋なので、探検をしているだけでも楽しいようだ。

ひとしきり遊び終わると、二人は王妃達の所へ戻ってきた。

「おかあさま！ わたし、おなかすいちゃった！」

「ぼ、僕も……」

お腹を押さえながら二人は、スージーとトリスに訴える。スージーが口を開く前に、カナンが口を開いた。

「では、ちょっと早いですが、食事の手配をしましょう」

カナンが退室していく。

家族だけになり、スージーとトリスは宿の感想を言い始める。

「たった数時間で、どれだけ度肝^{どぎま}を抜かれたんでしょうね……」

「そうね。どれも変わった趣向ではあるけど、世界でも類^{るい}を見ない宿でしょうね。外観、内装、サービス、そして温泉。これが本格始動したらどうなるのかしら」

接客に拙^{たな}い点はあるが、それを帳消しにしても余りある衝撃があった。

「わたしね、またここに来たいな」

マギーにとっては、初めての宿で初めての泊まりだった。随分喜んでいるようだが、スージーは今後の事を考えて少し不安になった。

「あのね、マギー。この宿は普通の宿とは違うからね？ この宿はね、タクマさんが力を結集して作り上げたもののなの。他の人に真似のできないようなすごい物がいっぱいだったでしょ？」

スージーはそう言って、この宿を基準にしないように念を押した。ここを基準にしてしまえば、他の宿に泊まった場合の落胆が大きくなってしまふからだ。

「そうなのか。タクマおじちゃんって、すごいんだね」

難しい事は分からないが、タクマがすごい物を作り上げたと聞いて、マギーは手放しに感心する。

「お母様。タクマおじ様はすごいんですね。かつこいいです」

シヨーンはタクマに憧れを持ったようだ。

トリスが応える。

「そうね。タクマさんは、使う人が楽しんでくれるように頑張ったのでしょうね。でも、シヨーンだって、将来は国の民達を幸せにするんじゃない？」

「はい！ みんなに幸せになってほしいです」

シヨーンはそう言って胸を張った。

そんな事を話していると、部屋の扉をノックする音が聞こえる。

「お食事の用意ができました。入室してもよろしいでしょうか？」

「どうぞ。お入りになってください」

「失礼します。お食事の給仕をさせていただく、ファリンと言います。よろしくお願いいたします」

スージーが迎え入れると、そこにはカートを押したファリンがいた。

食事の時の世話は彼女が行い、その間にカナンは休憩を取るのだ。ファリンとスージーは面識はあったが、初対面のように振る舞っている。

ファリンは手早くテーブルに食事を並べていく。運ばれてきたにしては、全ての料理が熱々

だった。

「ファリンさん。すごく熱々なのは見ただけでも分かるのだけど、何故冷めていないの？」

スージーが首を傾げながら聞く。

「お食事を持ってきたカートに、状態保存の魔法が付与されているんです。なので、できたてそのままでお届けできるんです」

テーブルに並べられたメインの料理は、水炊き^{みずた}だった。その鍋の脇を、天ぷら四種、酢の物、茶わん蒸しが固める。

カートには、おひつに入ったご飯と卵が置いてあった。

「この木の箱に入っているのは？ ちょっと甘い香りがするけど……」

スージーが尋ねると、ファリンが答える。

「これはタクマ商会長の故郷で食べられていた、米という穀物です。商会長の故郷では、この米が主食なのだそうです。普段はそのまま食べるのですが、今日は趣向を変えて出そうと考えているので、少しお腹を空けておいてくださいね」

しばらくして全ての準備が整った。マギーとショーンは目の前の食べ物に釘づけだった。ファリンはその姿を見て笑みを浮かべる。

「では、鍋を取り分けますね。いっぱい食べてください。鍋という料理はみんなで食べるのだそうです」

ファリンは鍋の具材を取り分けて、各自に渡していく。

そして、タクマの家で行われている食事の挨拶をファリンが口にし、早速食事が始まる。

「いただきます」

「」「いただきます」「」

各々気になった料理を口に運ぶ。スージーとショーンは最初に天ぷらを口にした。

「はふっ！ あっふい……でも、カリッとして食感が面白いわ。それに、シンプルなのに美味し」

「すごく美味しい……野菜って苦いと思ってたけど……」

用意された天ぷらは、エビ、イカ、人参、たまねぎと貝柱のかき揚げだった。二人は、サクッとした食感と口の中に広がる素材の旨味に感動している。

「このプルッとしたのと甘酸っぱいのすき！ おいしいねー！」

「そうねえ。この酢の物だったかしら？ この酸味は癖になるわね」

マギーとトリスが言う。マギーは茶わん蒸しと酢の物がお気に入り、トリスも酢の物に感激していた。

茶わん蒸しは、具材の舌触りと鶏肉の味わいが最高なのだ。酢の物には、お酢だけではなくレモンの果汁も使っているので、酸味に深みが出ている。

その後、四人はメインの鍋へ手を伸ばす。

「問題はこれよね」

「ええ。取り分けて食べるのなんて初めてだわ」

スーギーとトリスはそう口にして、不安げにする。

食べ方が特殊だった。取り皿に取ってもらいはしたが、別に用意された小さなカップにスープが半分くらい入っている。ファリンからは、まずそれを飲んでほしいと言われていた。

四人は言われるがままに、カップに口をつけた。

「あら。鶏の味がとっても強いよね」

「でも、くどいわけじゃないわね。むしろとっても優しい味……」

王妃二人は、意外なほどにあっさりとした出汁^{だし}の味を堪能した。マギーとショーンもいつも城で食べているような味覚を刺激するようなスープではないので、あっという間に飲み干した。

「しょっぱくないー」

「お城で出されるスープは味が濃くて飲めないのに、これは飲みました」

そんな事を言う子供達に、スーギーは苦笑いを浮かべる。

確かにいつも城で出されている料理は、とても味が濃かった。豪華だが、子供達にとつては刺激的すぎるのだ。

出汁を味わった後は、取り分けられた鍋の具材を食べる。そのままでも美味しいのだが、備えられたボン酢を垂らすと、さっぱりと食べられた。

ひとしきり鍋を楽しんでいると、ファリンが話し始める。

「子供達の味覚はとても敏感なんです。小さいうちから強い刺激を与えてしまうと、細かい味が分からなくなるそうです。この宿で出す料理は、子供達でもたくさん食べられるように考えられています。じつは調味料は、味を調^{とと}える程度しか使っていません」

ファリンはそう言って、料理のコンセプトを話していく。

タクマの宿では、家族で一緒に食べるという事を重視していた。家族で食卓を囲み、同じ物を食べてもらおうと考えたのだ。

そのために、子供でもたくさん食べられる優しい味付けにしている。なお、味を濃くする場合は、自分達で味を足す事ができるようにしてある。

スーギーがファリンに問う。

「子供の味覚ってそんなに違うの？」

「大人とは別と考えた方が良いとの事です。出汁で味のベースを作り、調味料で調えるだけで、このスープのようにしっかりと味が出るんです」

ファリンが説明すると、スーギーとトリスは感心したように頷いた。

マギーとショーンの食欲を見れば、この料理の良さは一目瞭然だった。普段小食だと思っていた二人が、もりもりと食べているのだ。

思い出してみると、タクマの屋敷に遊びに行った時も、二人は普段より食べていた。てっきり運